

伊太利ところぐ

瀧川規一

〔フアシモ暴行を許さず〕現時の伊太利を口

にする者にして詩人ダンヌンチオ(D'Annunzio)の名と宰相ムソリニ(Mussolini)の名とを知らぬ者が無い。伊國皇帝の名を知らなくても彼等二人の名は知つて居る。ムソリニが統率するフアシスト黨(Fascisti)の名稱も亦ムソリニの名と共にこの長靴形の火山國の代名詞であるかの如く旅行者の耳に響く。ムソリニが伊國の主權を握るまでの伊太利は恰も蘊の切れた桶のやうなものであつた。

桶の形丈だけは猶保つてゐるが手で觸れるか風でも吹くかすれば、ばら／＼になり崩壊しさうな様子をして居た。同盟罷業が頻發する。有産階級が將棋倒しに倒れる。勞働者は自制力を失つて只徒に安逸を願つてゐる。被奪取物を奪還するてふ口實は夜盜公益が適用する。警察權は

威信を失墜する。

産業は一般に振はなくなる。リラの爲替相場が益々下落するばかりである。救世の福音を説いた勞働運動社會主義の運動が恣に振つた暴威の産物は國を擧げての疲弊であつた。

社會主義の一新聞に深き關係をもつてゐたムソリニが一朝にして極を變へた電氣の如くに陰性から陽性に變つた。彼の率ゆるフアシスト黨は磁極に集る電子である。抑もフアシスト(Fascisti)の語原は拉典語の *fascis* から來て居る。

羅馬時代に執政官に隸屬した官吏が權票として幾本かの棒の束ねたものをもつてゐた。この棒束の中には一つの斧があつた。十二人若くは二十四人の官吏等が地方長官その他の官人にそれを示して自己の官職の何たるかを明示した。この權票の束桿をフアシセスと名づけた。今日ム

ソリニの率ゐる政黨の名稱をフアシストと云ひその主義をフアシズムと云ふに至つた経緯を實際と理論の上から論評することは本記事の目的ではない。只旅客として見聞に觸れた細鱗の一片を傳へ得れば目的を達したのである。フアシスト黨はムソリニと云ふ一執政官に隸屬する昔の東樺捧持者の集團であると解すれば早判りである。

フアシスト黨に屬する一青年が「フアシモ（フアシスト黨員）は決して暴行を許さない」と汽車中で語つたことがあつた。彼の所謂暴行は政治的衆團的暴行であるか若くは個人道義的暴行であるかを疑ふならば彼の言は甚簡單であつて眞意を捕捉するに苦しむのであるが、その言を聞いた時の前後の事情から察すれば左程難解ではない。彼の云はんど欲する處は「フ黨が天下掌握の後は從來の如く外人旅客の所有物を奪ひ盗むことを許さず無力の人を窘めることを許さない」と云ふのであつたらしい。兎に角フ黨が全勢力を占めて居る都市では然らざる都市より

も町の様子が整備してゐる。斯る都市では淺緑の服を着、白き羽毛の飾をつけた帽子を冠つた青年が數人連れ立つて往來を歩いてゐるのを見時には武装嚴しき憲兵を見ることさへ屢である従つて往來安全であり外人旅客は強奪強要の憂目を見る事が尠い。

斯うした町では兎もすれば家屋の壁や石柱にムソリニの顔を墨で巧みに描かれてゐるのを見た。その繪は彼の顔の特徴を巧に捕へて居るので一見紛はなかつた。然かも幾度か見たその繪は全く同一であつて版型で捺したやうにも思はれた。選舉運動の際に清くある可くして清からぬ運命を辿り勝ちな一票を哀願する宣傳ビラに立候補者の肖像を印刷するのと同趣向であつたかも知れない。伊國の主要都市に足を留める時に綠服白羽の帽を見ない日は何となく不安を感ずるに至つた。夜間外出を危険なりとホテルで教へられた都會は案の定ムソリニの權力の未だ及ばぬ都會であつた。

現記者が滯英の當初新聞紙上で英人旅客が屢

伊國で遭難することを知つた。箸の倒れた程の瑣事でも伊國に於ける遭難談として堂々たる大新聞紙上の寄書となつて居た。愈伊國旅行の日が近づくど先入知識が禍をなして多少不安の念に驅られた。然るにこの不安をして杞憂に終らしめた事件があつた。

シンプロン(Simplon)の隧道を七月の末に通過すると、蘇西側の隧道の入口で冬服を着てゐた者が伊太利側の出口に近づくど、汗づくになる程氣候が變る。冬の雪の入口から眞夏の暑の出口に運ばれるのである。出口に近づく頃に汽車中で税關吏が手荷物の検査をする。正式の税關吏のお手傳をフ黨の青年がしてゐる。例によつて緑服羽帽の青年が來て旅行券と手荷物とを調べることになつてゐる。車内の一室に六席がある。向側の三席には英人らしき若夫婦と商人らしき中年の佛人が居る。自分の坐席の側には中年に近いと思はれる米人夫婦が居る。汽車が隧道の半以上を過ぎた頃にどうした途端か列車が突然激しく震動して、しゃくり上げた。同時

伊太利とこゝろく

に荷物棚に載せてあつた小形のストケースが轉げ落ちた。不運にも米婦人の頭の上に落ちて來た。婦人は巧に頭をそらしたが大事の眉目に極めて微かな擦傷を負ふた。婦人は額を抑へつゝ「荷物の載せ方が拙いからこんな目にあつた」と云つて落ちたストケースを靴で蹴り始めた。見るとそのストケースは現記者のものである婦人がそれと知るや否やジャップ呼ばばりを連呼して益強かに鞆を蹴つた。その昔ガスコ先生に手ほごきをして貰つた伊語で覺束ないながらお辭りの挨拶を云つた。婦人は「ジャップの口答は米婦人全體を侮辱するものだ」と英語で喚き出した。その上鞆の上に乗上げて地駄を踏んだ。哀にもその鞆は蓋の四隅がはじけて今日まで其時の記念となつてゐる。先刻より二人の青年がこの様子を車室外の廊下で眺めてゐた。汽車が或る地點に達すると一人の青年は室内に入り順次に旅券を調べて立ち去つた。他の一人の青年は棚上の鞆を一々所有者に卸ろさしめて内容を検査し始めた。最後に婦人の足下に扁平に

四六

六三

ひれ伏す光榮をもつた鞆が検査される番になつた青年は單にその所有者の國籍を聞き質した丈けであつて内容を檢めやうともしない。のみならず親切にも他の人々の鞆を押し詰めて荷物棚の上に載せて呉れた。米婦人は何事か抗言をし始めたが青年は「云ひ分あらばイゼレ (Jaelle) の次驛で下車せよ。」フアシモ暴行を許さぬ。と云つてとり合はない。さうしてさつさと出て行つて了つた。すると夫君たる人は妻君を宥め勞ふ積か人前も構はず抱擁して接吻した。抱擁の最中フ黨服の青年がまたも入口から大聲で「イゼレの驛が來た。云ふことがあらば下車せよ。」と怒鳴つた。

滿座只苦笑を蔽ふのに苦んだ。その時の米夫妻の當惑顔は今日でも光榮ある鞆を見る毎に眼前に彷彿としてゐる。

羅馬に着いた時知人の宿所を書いた紙片を自動車の運轉手に見せて乗車した。豫ねて聞いてゐた車程五分ばかりの處を十五分も乗り廻はされ強ひて停車を命ずるとタキシメータに示し出

された賃金の倍額を要求された。それを拒絶したが爲めに運轉手から將に鐵拳を見舞はれんとした。その時通り合はしたフ黨青年に事情を訴へて體刑の難を免れた。初めて來た土地で目的以外の地點に御ろされたが爲めに行く可き處も定かならず遂にホテルまで案内して貰つた時のうれしさは伊國の當時の暑氣と共に京都の暑氣を啣つ毎に記憶が新に繰返へされてゐる。

個人の遭難救難の出來事は極めて瑣事である然しそんなことを體驗したが爲めに「フ黨暴行を許さず」の一言が身に浸む生きた言葉となつた。フ黨が今日までなした一般的行動業蹟が明白になればなる程黨是に反抗するものが窮迫することを認めなければならぬ。これは止むを得ない。共產黨が全盛を占むる際にも彼等が標榜するが如く萬人悉く至福に恵まれるものではない。フ黨が全盛を占めるにしてもその陰に惱む者が絶無であるとは云へない。然しながら新主義の勃興が急激なる際に不自然なる窮迫が破壊的政治に多きや建設的政治に多きやを反省しな

ければならぬ。破壊した後には建設に移ることと従来の建設の利用す可き處は利用して然る後に新なる建設に着手することとは、何れが得策であるかは識者を待つて初めて知り得る事ではない。翻つて伊國のフ黨のなす業蹟と隣近の露國の共產黨がなす現状とを英米佛獨伊等の著述によつて不充分ながら窺ひ得た丈けで判斷するならば一旦破壊した後には建設に移つた露國と、破壊せずして建設に進んだ伊國とは何れが健全なる歩み方をしてゐるかは自ら明である。一向に模倣をもつて得意とする極東國人や宣傳の提灯持たることをもつて得意とする所謂明腦の人々の一顧を要する點は磁力の兩極の何れかから發足した露のレニンの遺業と伊のムソリニの業蹟とが今日如何に歩み寄つてゐるかの點である。破壊せずして而かも建設的に進み、破壊主義者がなし來つた幾多の行蹟のうちからその美點のみを採用し利用してゐるムソリニの遣り方が得策であるか、將た最初から破壊主義をとつた者が破壊は容易くなし得たものの建設の必要に迫

まられ建設の道程に入つては只新らしき外被を着せるに止つて實は先進者のなし來つた處に追隨するに過ぎない露國の現状を賞揚す可きであるか、幾多の政治的社會的及び經濟的實蹟に於て今日伊露兩國が如何に相接近してゐるかを靜に觀察することによつて前述の兩者の得失を考察することは興味深き啓示を得るであらうと思はれる。

想はぬ比較論をなしたが、伊國に入るに及んでフ黨の主義實蹟の何たることを知るに多大の興味を覺え機會ある毎に糾明を心得たが非才未だ全般を知るに至らないのを遺憾とするのである。

新 著 紹 介

○軌近鑛物學

青山信雄 木下龜城共著 東京神田淡路町文啓社書房發行 菊版五七八頁+索引 九月 定價四圓八〇錢

最近鑛物學は物理的研究の進歩されたので著しく内容を異にして來た。然るに我國には未だ新しい研究を取り入れた手